

## 柿崎 順一が生きる、一瞬の芸術行為

鈴木 一史 (小海町高原美術館 学芸員)



Photography by Joji Okamoto © JUNICHI KAKIZAKI HANA OFFICE+PEALab. Courtesy of naonakamura

### 舞踏 × 花

2024年6月18日、東京都墨田区両国にある劇場シアター X にて、スウェーデンを代表する舞踏家 SU-EN による舞踏公演が行われた。『生きる』 IKIRU-to live と題されたこの演目の一場面に、特別出演として登場した柿崎順一が“花を生ける”という行為をみせてくれた。

SU-EN のソロ・パフォーマンスは「人間界・自然界・動物界」のそれぞれの範囲を渡り歩き、存在を調和させ、抽象化させたかのような、特異な表現であった。舞踏を舞う SU-EN 自身が人間であることを徐々に忘れていくような動きと表情をみせ、それぞれの世界が常に切り替わり、混ざりあっていく。その一挙一動に観賞者の精神が反応した。そうして抱括された観客の意識の集合は、舞台空間そのものがまるで北欧の牧歌的な自然風景のヴィジョンとして想起させられた。舞台の終盤において柿崎順一は、SU-EN の髪に薄紅色のペゴニアを一枝ずつ挿していった。SU-EN という舞踏家、すなわち人間を支持体として“花を生ける”パフォーマンスを行った。同時に柿崎は現代美術家として、即興の公開制作により、生命による造形、生きた花の彫像を築いたともいえる。ペゴニアの花と葉が、SU-EN の頭上のみならず、やがて顔の側面を埋め尽くしていくまでの時間は、ゆっくりと流れ、厳かな祭事のような様子でもあった。受けた印象が、一本一本植えていく、一体化させていくという感覚に近いものだったためか、頭上の装飾であるのにも関わらず、花の冠や帽子をかぶったという印象はあまり持たなかった。

### “花を生ける”という行為

SU-EN は頭上に花を纏い、植物を繁茂させた状態で再び舞台へと上がっていった。舞台にて現在進行形で動き続ける舞踏家と、生々しく潤いを湛えた状態の花とが最高潮の状態であれ、各々の生命観とが融合を果たしたのだと、感じられた。また、これまで抽象的で観賞者の想像に委ねられていた舞台上の自然観に、具体的な生命の存在、“花”が取り込まれた。このことにより、自然物そのものが存在することで知覚できる生命の色や香り、

自然の形の複雑さと美しさを実像として認識させられることになった。空間は、その現実の風貌に直接的な優美さを手に入れた。舞踏の舞台において“花を生ける”という行為の登場は、異なる異次元のパフォーマンス（行為による芸術）の導入であった。行為は、舞台家に、観客に、空間という環境そのものに様々な付加価値を与え、変化をもたらした。柿崎は“花を生ける”という行為によって場を一変させることで新しい環境に作り替えたといっても良く、生け花という芸術表現がそれを引き出す環境芸術の装置ともなり得るということを証明した。

## 限界からの挑戦

昨年7月に脳梗塞を患ってから約半年間意識を失い、今日では車椅子生活を余儀なくされ、利き手の右手さえもが不自由となった柿崎にとって、本公演でのパフォーマンスは身体も精神もが軋む仕事であったに違いない。これまで何千何万回と繰り返してきた“花を生ける”という行為、そのものが不自由になってしまったと知った今、その瞬間瞬間の所作の全てから壮絶さを感じずにはいられなかった。今回の舞踏公演において「わたしたちに、どんなことが来ても。痛み、喜び、挑戦。一呼吸ずつ」というSU-ENのメッセージが添えられていた理由をあらためて知ることとなった。このメッセージはSU-ENから、20年以上交流を続けてきた柿崎に向けられたものであったと思う。柿崎はやがて自身の命が終わってしまう“かもしれない”、もしかしたら終わってしまったの“かもしれない”という最後の覚悟でそれに応えたのだろう。そして観客は、今「生きていることに感謝するしかない」と述べる柿崎の現在の姿を、花を扱うということに人生をかけてきた柿崎の一瞬の行為的芸術を観にきたのである。

## 一瞬の美術表現

現代美術において、花や植物という生の、恒久的ではない存在、生命が宿る素材を対象に芸術表現を行い続けるのは非常に稀でもあり、難しい事例でもある。そのなかで、柿崎順一という美術家は、花を素材として扱うことを主軸として、生命の儚さと変化、その限られた時間の中に存在する美しさを表現するために作品を作ってきた。一瞬の美を捉え、写真や映像としてその一瞬一瞬の姿を残して来た。舞台芸術としての柿崎のパフォーマンスもまぎれもなく、柿崎順一という生命における輝きの一瞬であり、限界へと向かう最中での行為=美しい芸術表現であったということだ。作品として飾られたベゴニアという花にとっての一瞬、その姿と時間は、制作者である柿崎にとっての一瞬、舞踏家SU-ENにとっての一瞬、同じ時間を共有した観客にとっての一瞬でもあった。



Photography by Joji Okamoto © JUNICHI KAKIZAKI HANA OFFICE+PEALab. Courtesy of naonakamura